

星モグラサンジ考

— 心理学的考察 —

山 田 真理子

周りの大人の言うことを聞く気がなく自分の言いたいことを言ったらさっさと勝手なことばかりして、自分のことしか関心がなく、落ち着きがなくて、目上のものを「立てる」ことのできないモグラのサンジが主人公のこの童話「星モグラサンジの伝説」(岡田淳・作、理論社)、そして人形劇団・京芸による人形劇(演出・つげくわえ)は、私にたくさんの連想を呼び起し、今の子どもたちの状況を考えるときにヒントとなるものを含んでいるようにも思えた。演出も含めて、この作品を分析してみたいというのが本稿の目的である。

第1章 誕 生

サンジはその名前のとおり3番目の子である。上の2匹が普通に生まれたのに対して、サンジは流れ星が落ちたための地震に驚いた拍子に生まれた、普通の半分ほどの大きさのちっぽけなモグラだった。生まれ方も変わっていたが、サンジの変わり様はそれだけではなかった。手足は人一倍大きく、おっぱいを呑みながらもばたばたと土を掘るように動かし、いっときもじっとしていない。巣の中の糞をめちゃくちゃにして走り回り、初めて見るみみずもあつという間に食べ、土堀りを教えた途端に、さっさと巣離れして行ってしまったのである。

さて、主人公が3人兄弟の末っ子であり、その子が他の子とは少し変わった特徴があるという設定は、昔話におなじみのものである。私はかつて、このことを「末っ子ばかりがなぜ?」というテーマで書いたことがある。「3人兄弟は別々の人間としてではなく、自分の中の3つの側面であると考えてみると、末っ子はいわば自分が欠点と思い、押し隠したい、人に見

せたくない側面を表わしているものと思われる。だから初めは、親や兄弟にはかにされ、表に出られないようなことが多いが、この末っ子は、動物や魔女、妖精のような、人間以外のものに助けられながら、困難を乗り越えて行くのが大抵の物語りの流れである。人間以外のものに助けられるということはこの末っ子が、(心の中の) より動物的な衝動や、無意識イメージのエネルギーに近いところにいて、それらの力を得やすいということであろうが、だからこそ意識に近いものから見れば、わけのわからない理解しがたい不気味さを持っているのかもしれない。しかし、この末っ子が結末では、あるいは王子様と結ばれ、あるいは王位を継ぐのであるから、この自分にとって欠点に見え、押し隠したいような一面こそが、今の行き詰まりを開き、自分を自分のものにするための大きな鍵になるということではなかろうか・・」というのがその主旨であった。

しかし、サンジの話においては、これらの昔話と共通する部分もあるが、それとは異なる部分から現代における3人兄弟(心の中の)の有様を推察することができる様に思われる。

サンジが家族の中で昔話の3番目のように押し隠された存在ではなく、いつも「かあちゃん！ぼく、かしこい？」との強い自己主張によって、ため息混じりではあっても母親に「かしこいよ、サンジ。おまえはかしこい」と言ってもらいながら育ったことも一つの特徴である。2匹の姉を押し退け、新しい食べ物もためらわずに食べ、母親の「なんでも食べないと強いモグラになれないよ」という言葉を文字通り受け取ったサンジはしまいには岩や鋼鉄までも食べてしまうようになるのである。母親との強い絆、禁止はせずにため息をつきながら子どもの要求のままに動く母親、その結果としての自我の未成熟。。もちろん作者はそんな主人公像を書いたのではあるまいが、私には、そんなことが連想され、それが又現代の母子関係を示唆するものとして興味深く思われた。

また、サンジの特徴はその食欲にある。その追及のために遂に空を飛び、人工衛星までも食べてしまうのであるから並大抵ではない。その結果が、環境破壊を阻止し、危険な人工衛星から地球を守ったので、サンジは英雄になり、救世主になったのだが、サンジのしたことと言えば、「おいしそうなものをためらわずに食べた」だけのことである。そして、どんなに英雄になろうとサンジは相変わらず、おいしいものを求めて空を飛んで行く

のだろう。心は生まれたときと少しも変わらず・・これを「成長せず」と言って良いのか。。。

サンジの動機はほとんど本能的（無意識的）である。無意識的であるということは、無邪氣で無心であるということで、そこが子ども達にとっては共感しやすく、引きつけられるところであろうが、無意識的であるが故に終わりがなく変更もない。それは、すばらしさであると同時に恐ろしさもある。サンジはこれからも食べ続けるであろう。そして、その結果が必ずしも今までのような英雄的な行動となるわけではないことはおおいに想像できる。この飽くことなくエネルギーを取り込もうとする姿は、現代人の爆発的なエネルギー消費量の増大を連想させるし、次から次へとゲームにのめりこみ、あるいはレジャー産業に、幼児教育産業にと走る現代人の不安定さもつながって見えてくる。

何でも食べる・・という主人公で思い出すのは、「食わず女房」の話である。“なかなか嫁をもらわぬ男が、「飯を食わぬ女なら良い」ということで女房をもらう。この嫁、男のいるところでは飯を食わぬが、実は、男が出かけると、頭の真ん中にある別の口から、おひつごと飯を食うのであった。そして、それを見つけられた女房は、男も食おうと追いかけるのである。” この話はそもそも男が「飯食わぬ女」などという「人間ではありえないこと」を求めたことからすべてが始まる。その条件に当てはまるものは人間ではありえないものである。しかし、私はこの話の中に、「今の子育てでも、人間本来ならありそうにないことを求めている面がなかろうか。・」、と思い付くところがあり、また、その結果、おとなしく親の思いどおりであると思っていた子が別の口を持っていて、ついには親を食おうとして追いかけてくる姿がみえるような気がするのである。「おしっこを3回してもお尻がぬれない」「粉を溶いただけで食べもの（離乳食）が出来る」という便利さ、「水に触ることや土で汚れることを嫌がる」子ども、「眠っているときまでも音楽やお話を聞かせ」たり「お腹の子に字を教える」などの超早期幼児教育など、人類史上人間が育つ道としてあたりまえであったことが今急速に失われ、まるで別の生き物を作り出そうとしているかのような子育てが見られることに、「食わず女房」のお話の後半の恐ろしさを感じるのであり、その兆はすでに「家庭内暴力」など多くの事例に現われていると感じるのである。

第2章 不適応

母親には認められて育ったものの、母の元から自立したサンジは、モグラ社会のなかでは問題児であった。家族社会の中で押し潰されなかった末っ子は、社会の秩序を乱すものとしてモグラ社会に登場したのである。欲求のままに（だからこそ底知れぬエネルギーを持って）動き回るサンジ。他のモグラの自立してからの生活とはまったく違う。他のモグラと違い、サンジは巣を持たない。後に結婚してからさえ、サンジは巣にとどまらない。私はここに、大人にならない子ども＝永遠の少年像を見る。モラトリアムの中で、大人になろうとしない、大人の価値観に染まらず、それまでの社会通念を無視し、自分の欲求を最優先する大きな子ども・・それがサンジである。我慢や落ち着き、役割意識などというそれまでの社会における大人の態度として必要とされていたものはサンジにはない。したがって、他のモグラなら敬意を表して恐れる「長老会議」の決定でさえ、サンジには何の拘束力も持たない。「長老会議」の伝言を伝える年上の（サンジのおじさんというくらい）モグラとの会話は、会話にならず、サンジはこの伝言モグラの言葉に耳を貸そうともしない。いや、自分の聞きたい情報に対しては聞いている。しかし、相手の言いたいことに対しては、会話を持とうとしない。

「わたしは、（中略）北のはての地区を担当するものです。今から伝言を言いますから、聞いてください」

「どうしておじさんが北のはての地区を担当するものなの？　ここより北にはモグラはいないの？」

「そ、そうです。では、伝言を聞いてください」

「どうしてここより北にはモグラはいないの？」

「この春から、ここより北にはモグラはいなくなったんです。伝言を聞いてください」

「どうしていなくなったの？」

「なんでもとてつもなくでかいヘビがいて、いやそんなことより、伝言をきい」

「ヘビって、もぐらをたべるの？」

「そうらしいです。伝言を」

「ヘビってどんなやつなの？」

「その、ミミズを大きくしたようななりをしているらしいです。それより、伝言」

「ヘビって、岩よりかたい？」

「岩よりかたいヘビなんていません。伝」

「ありがとう」

あっという間に風がまきおこり、サンジの姿は消えていた。

本で読み、人形劇で見たら笑ってしまうこのシーンなのだが、こんな会話に実際に自分で出会うと、たまたまものではない。

ある団体旅行のメンバーの中で、私は初めて会った4歳位の子に「なんて名前？」と聞いた。その子の答えは「おばさんは？」であった。「山田よ、あなた・」「ああ、やまざるかあ」「？？ おばさんは、や・ま・だ。あなたは？」「山猿なんでしょ、なんでこんな所にいるの？」「(少々ムカッ)おばさんは名前教えたんだから、教えてよ」「山猿なんかに、呼ばれたくないもん！」・・・まともな会話にならない。これほどでなくとも、最近、子供たちの中で、ストレートな会話でなく、人をばかにしたり、ジョークでかわしたりするやり取りの方が好まれて使われる傾向を強く感じる。長男にこの話をしたら、「それはその子がそうされているからだと思うよ。その子に大人がばかにした言い方しかしてなくて、ちゃんと取り合ってやらないからじゃないかな？」と解説してくれた。なるほど、大人が子どもと対等な会話を持とうとしない結果が、今の子どものコミュニケーションの力の欠如をもたらしているのかと納得もする。

以前、「怖がれない子」「心動かしたがらない子」と題して子どもたちの現状についての危機感を語ったことがある。「怖がれない子」は、舞台劇を見ていて、隠れている王子を探しに来た大臣が登場したとき子どもたちが「後ろ！ 後ろに隠れてる！」と叫んで隠れていることを教えようとしてしまったことがヒントだった。不安に対する耐性が低いために不安を呼び起こすような事態に対してハラハラドキドキして待つより結末に早くたどり着くことを求め、早まって結論を言ってしまったり、答えを教えようとしまったりする子どもたちのことである。絵本を読んだり、人形劇や舞台劇を見ているときに、特にクライマックスのいいところでジーッとそ

のハラハラドキドキを共有できず、「～～したらいいよ！」「これ～～なるんだよ！」といってしまうのだろうと考えた。母親の懷に抱かれながら、あるいは爺ちゃんの膝に抱かれながらお化けの話をせがんだ昔の子どもたちとは逆である。かつては、母の懷、爺ちゃんの膝という様な「守り」があって始めてその話は共有され、ハラハラドキドキを楽しむことができた。それが失われた子どもたちは、ハラハラドキドキは楽しみではなく、不安を呼び起こすだけのものになってしまったのだろう。その時、この守りの薄さがさらにすすんだりあるいは、不安がもっと強くなると、子どもたちは「感じること自体を拒否する」であろうことを予想した。これは、親から離されてICUに入院していた子どもが再び親にあったとき、忘れるほどの期間でもないにかかわらず、親を認知できないことがかなりあるという医者の話からの推測であった。

それから数年の年月がたって、「心動かしたがらない子」を書くきっかけになったのもやはり舞台劇を見ているときだった。ハラハラドキドキする以前に、子どもたちは、役者の「怖いものなんかなにもない！」「もうすぐ春休み！」というせりふに対してすぐに、「蛇も怖くない？ライオンは？ピーマンは？・・」「冬休みは？ 夏休み、海行ったよ！」などと言ひだしてしまい、ドラマを進ませたがらず、劇が始まることすら阻止しようとしているかのような様子が伺われたのである。自分の知っている、自分のおなじみのものなら安心できるが、それ以外についてはできるだけ入り込むまいとし、心を寄せず、斜に構えて、心半分にしか関わろうとしない・・そんな子どもたちが増えている。自分の持っている範囲の会話に持ち込もうとし、なじんだテレビのギャグで済まそうとしてしまうために、会話が成立して行かない。「～～しようよ！」という呼びかけに対して「エ～？！」というのが答えであった時代は早くも過去になり、いまや「～しようよ」と言うと「したら？」とかえってくる。この会話は、もはやテレビのギャグを越え、子どもたちの物事へのかかわり方全般に影響を及ぼしている。そして、物事や深刻さに直接関わる強さを持たないという心のもろさの露呈であることに本人は気づいていない。

さて、「星モグラサンジ」に話を戻そう。昔話において上の二人がそれぞれにその時代における価値とされるものを持ち合わせて描かれているのに対し、サンジの姉たちはほとんど特徴がないまま置いてけ放りにされ

ている。ここにも私は今の時代の特徴を感じるのである。つまり、無個性の2匹との対比として、サンジの在り方がクローズアップされていることが今の子どもたちのおかれている状況と照らし合わされて感じられるのである。一方に、人がすることはなんでも追従しようし、結局は没個性の中で安住する大人や若者たちがいて（無個性の先輩達）、それに対して、自分の土俵でしか関係を持とうとしない子どもたちが現われてこなければならなかつたというのが現代という時代なのかもしれない。そして子どもたちはいつの時代もその時代の最先端にいて、時代の状況の告発者なのである。決してその子どもたちが悪いのではない。

自分の欲求のままに、自立したモグラとしての常識からはずれた生活を続け、それまでの社会秩序を乱すサンジは、長老会議の決定などにはまったく影響されず、「おいしいものを食べたい」というただそのために旅を続ける。そして、その社会の枠をはずれ続けた結果、その社会を閉じ込めていたものを破壊し始めるのだから、自立して旅に出るに及んでサンジはやっと昔話の末っ子の持つ新しい秩序の具現者としての特徴をもあわせ持つことになる。そのきっかけとなったのは、星を食べたことだった。

第3章 星を食べる

北のはてのモグラから「ヘビ」がみみずの大きなようなものであると聞いたサンジは、それを食べるため地面にあいた深い穴に下りて行く。ヘビは、モグラ（サンジ）を食べるため穴の中で待っているが、やって来たサンジはつぎつぎとそのあたりにただよう「いい臭い」について尋ねるものだから、それが「星」であること、ふつう空にあって、これはこの春地面に落ちて来たものであることなどを教えるはめになってしまった。その後、ヘビはサンジを食べようと口を開け、サンジはその中に飛び込む。サンジもヘビを食べるためだ。土の中を地響き立てて掘り進むことのできるサンジ、土の上に飛び出したらその勢いのあまり10mも飛んでしまう早さで掘るサンジ。あっという間にヘビのおなかに大きな穴を開けて食べてしまった。

モグラが目が見えないとしたら、まさに・・・ヘビにおじずなのだが、知らないものの強さというだけではない。サンジが蛇の中に飛び込んで、

おなかの中から食べてしまうのもすごい。中と外の反転、思っても見ないやり方で、戦いもせぬうちに相手をくだしてしまうことが特徴的である。サンジのがわの意識がただ「食べたい」というだけであることも特徴で、「食べる以外のことには頓着しない」から相手のもっとも弱いところに食い付くことができている。このあたりも、相手の弱味にすばやく付け込み、相手と対等な関係を持とうとしない今の子どもの人間関係の持ち方を思い出させるところがある。結果としてどうなったら良いと思うかには関係なく、今日の前にあることを楽しめればいいというような楽しみ方が現代には充満している。現代という時代の特徴の一つとして、心の領域においても、家庭においても、社会においても、うちと外、内面と外面が、かつてほど区別されていないということもあるかもしれない。

土の中の代表とも言える「モグラ」が空の「星」を食べるということ。この地中と空との結び付き、地中のものが空のものを食べる・・ということを少し考えてみよう。これは人間の心の中の深い無意識的なエネルギーが今、精神性を食い潰し始めているということなのかな。（その兆しも見逃してはいけないだろうが）私はそれより、地中に象徴されるものと、星に象徴されるものの一体化がなされるときが来ていると考えてみたい。それまでのモグラ社会にしてみれば、まったく理解しがたい行動をし、秩序の破壊者であるサンジが、星を食べるという行為を通してさらにその力を増したとき、モグラ社会を破壊しかけていた別の危険（自然破壊のブルトーザー）を排除してしまうという結果を生み、評価が一転する。サンジの評価は、大人の（既に社会を担っている）モグラより、若いモグラたちの方が早いことも、良くあることである。

ではこの、「星に象徴されるもの」とは、何のことなのだろうか？ 無意識的衝動が、コントロールされないまま成長しているような今の子どもたち、そこに何が要ると語っているのだろうか。サンジの食べる星にそのヒントを求めてみよう。サンジは星を食べて、「甘いところの後にさっぱりした所、その後にこってりしたところや、ぴりっと辛味のあるところ、もちろん歯ざわりもちがう。ぱりぱり歯ごたえのあるところ、とろけるところ、ざくざくしたところ、こりこりしたところ・・・」と飽きるということがなかったという。実際の所は金属のかたまりで、鉄にいろいろな金属が混ざり合ったものが「星」である。この「モグラ社会を遥かに越えた

いろいろ」との出会い、しかも様々なものがぎっしりつまっているようなものとの衝撃的な出会いが要るといっている。これは今の子どもたちに置き換えたときに、何にあたるのだろうか・・。答えは様々に推測されるに違いない。しかし、それがあって初めて、サンジは英雄になりうるのであってそれなしには、モグラ社会の破壊者から脱皮できないことを知っておかねばならないし、現代に生きる私達は、この「星」にあたるものを探索し、掴まねばならないことが示唆されている。

この「星」とは、高い精神性に裏付けられた（=質の高い）、様々な感情体験がつまつた文化との感動的な出会い・・と連想を広げることもできよう。児童演劇や優れた音楽との出会いによって子どもの中のエネルギーが一つの整理されたはけ口を得、昇華されたときにサンジの持つとてつもない衝動性は生産性を持つことができるのかもしれない。しかも、初めの星は地に落ちていた。サンジの住む「地中に星がやって来る」という、いわば「天地がひっくりかえるようなこと」が実は新しい展開のきっかけになるということもここで心に止めておきたい。もう一つ、地中にある星ということから連想するのは、「身近さ」である。星に象徴されるものがなんであれ、星が空にあったとしたらサンジは星に出会うことはないままに終わったかもしれない。いかに質の高い、精神性の高いものが必要だとしても、それが子どもにとって遠い存在であったら子どもの力にはなりえないということである。子どもが身近に体験できるところに凝縮された感情体験を・・ということになる。

また、心の中のこととして捉らえて、自分の中の、どろどろした混沌を一つ一つ分化して自分のものにする体験・・と置き換えてもいい。そう考えたとき、星にあらわされる自分の持つ未分化な資質を時間をかけて、味わいながら、自分の物にして行くことの大切さ・・その前にはヘビ（危険）があるかもしれないが、それをも自分のうちに取り入れ（食べ）、初めて出会う不可思議な物も、積極的に取り入れて行くしたたかなたくましさがあるならば、それは自分の力となることができるということなのであろうか・・。

星を食べる・・・そこからの連想は、読者（観客）に任される。しかしそこには、いずれにしても、これから的孩子たちにとって何が必要なのかが如実に導きだされてくるように思われる所以である。その「連想に基づ

いた発想を実践に移す」ことこそが、実は「星を食べる」ということなのかもしれないとも思うのである。

第4章 笑いの演出

ここで、原作から少しあなれて、つげくわえ・演出による人形劇としての表現の中での連想について述べようと思う。特に、私の気を引いたのは、「笑いの演出」であった。原作の中の「語りモグラと作家」という話の進行係に加えて、人形劇では、場面がかわる度に「歌」が入り、その最後の落ちは、「サンジ・サンジ・三時のおやつは？」という笑いであったほど、この作品全体が「笑いの中で話が進行する」形になっている。しかし、今の子どもたちが使う、Manic defence（躁的防衛）と思われるような「笑いへの逃避」と、何が違うのかを明らかにしないと、「笑いの演出」は子どもの心にとって危険でさえある。笑いには共感と差別の相反する側面がある。共感の笑いが生まれるには笑いを共有する仲間が要る。ところが、今の子どもたちの使う「笑い」の特徴は、第2章で述べた子どものように、人を笑い物にして自分が当事者であることから逃げるという傾向を強く持っているのである。このごろ、テレビ番組の笑いの質がかわったと、かつてお笑い番組関係者が嘆いているという。「笑いに元氣がないのは、テレビの変容に無関係ではない。茶の間に一台のテレビの頃の笑いは一家の団らんに深く関わっていた。今は個室に一台のテレビ時代である。屁をひっておかしくもなし独りもの、というが、個室の独り笑いは、他人の失敗や弱者の行為を笑いのめすことによって身を引く笑い。傍観者の冷たい笑いと言っても良いだろう（松尾羊一・放送評論家）。」「ビートたけし」という強烈なキャラクターが持ち込んだ「相手を笑い物にする」という笑いの形が、今やお笑い番組の主流になっている。番組の中では、母親が我が子にとんでもない格好をさせて笑い物にしたり、我が子が泣きわめく姿を出演者たちが笑っているのを平気で眺めていることすらある。しかし、この笑いは、本当に緊張が緩和しての笑いではない。笑い物になった相手との、一つ間違えば自分が笑い物になる真剣勝負の緊張すらともなった笑いである。ビートたけしの強い緊張は、彼のチック症状が示しているが、深刻さを常にかわし続けることがいかに強度な緊張を強いるものであ

るかに、子育ての中にいる視聴者は気づいて欲しい。この笑いは相手を見くだし、差別感を伴なった優越感から生じる「あざけり」である。が、それには根拠が乏しいだけに、いつしつぺ返しがくるかもしれない緊迫感を伴なった安心感の欠如がある。

さて、「星モグラサンジ」に見られる笑いはいったいどのような構造になっているだろうか。つげくわえ（演出）という人自身が、打ち合わせ、リハーサルを含めて、話すほどにポンポンと冗談が飛び出し、まるで漫談を聴いているような、楽しい人である。しかし、彼女は、その半面に、自分の持つ別の面に対する深い洞察を持っている。彼女は、「パペットボンボンショー」（人形劇団・京芸）において、「からくり時計の中の人形が時計盤の裏側にいる間の暇を持て余して人形劇を始め（人形が人形劇！）、そのうち時間に縛られるからくり時計の人形であることから逃げ出してしまう」という作品を作り出したが、この人形劇に登場する人形を縛る時計も人形たちも、さらには人形がする人形劇の中の魔女も王子も、実は自分の様々な面を擬人化したものであり、その一人一人が自分であると同時にその人形劇全体が自分であると語ってくれた。そして、それを演じることを楽しんでいると同時に、一つのキャラクターとして一人歩きする人形からまた再発見している自分を楽しんでいるようでもあった。笑いの中にも自分に対して冷静に見つめる目を失わないこのつげくわえの持ち味が、「星モグラサンジの伝説」の演出にもちりばめられている。観客を笑わせたシーンをあげると、「蛇があっという間におなかを開かれてしまって骨が見えるシーン」「工事現場の監督が、人間の頭に人形の体というアンバランスな格好で出て来たシーン」「ニュースアナウンサーが額縁のようなテレビから顔を出して解説するシーン」であり、原作とも関連して笑わせたのは、神様が「さんずい（サンジ）よ、・・」という呼びかけと共に登場するシーンであった。初めの3シーンが、いずれもいわば恐怖の強いシーンであり、ハラハラドキドキするシーンであることに気づくだろう。つげくわえはその様なシーンを笑いにつつんで表現する。これを先に述べた「怖がれない子」との関連で述べてみると、サンジの恐怖体験や、物語として深刻な場面に直面したとき、子どもたちがその深刻さやストレスにたえきれずに自分の土俵に逃げたり、ちゃちゃを入れたりする前に、演出は見事にそれを「笑い」という安全弁で封じ込め、笑うエネルギーに助けら

れて、子どもたちはその物語の中に生き続けることができている。ちゃちゃを入れる暇もない。つげくわえはそれを意識していないかもしれないが、彼女の直感力は、子どもたちの緊張をいちはやく感じ、その緊張を緩和するキャラクターを配置することで、緊張をおおらかに笑い飛ばす力強さを子どもたちに与える。またこの笑いのシーンは同じ役者によって演じられており、この役者の一見とぼけた嫌味のない持ち味も、子どもたちの緊張緩和に一役買っている。蛇・・それは、モグラの敵であった。工事現場の監督もモグラのすみかを破壊するものだし、テレビアナウンサーは、大きな危険が迫っていることを知らせる立場、いわば生き物の敵の代理である。星モグラサンジではその様な主人公の敵が笑いの対象とされている。自分より強大な敵を笑いの対象とする手法は、チャップリンを始め、かつての喜劇の定法であったろう。この笑いの底には、共感がある。虐げられたものとまではいわないにしても、弱者が支配者に対して、一刺報いたいという思いを持つ平凡なる存在同士としての共感をベースにしてこの笑いは成り立っている。観客の持つ主人公サンジへの共感は、この笑いの共有によって、敵に立ち向かう協力者となり、サンジの破壊は痛快な救いと感じる。そこには相手を見くだした優越意識はない。緊張は緩和され、ほっとすると共に観客同士の連帯感と安心感が生まれる。この安心感が、緊張や深刻さに直面する力を支えるのである。この笑いをうまく配することで、「星モグラサンジの伝説」はたんなる英雄伝でも環境問題の告発劇でもなく「楽しかったぁ！」と子どもの心に抵抗なく入り込んで生き続けることに成功している。

第5章 枠

さて、ここでまた原作に戻ってみよう。この作品は、あるモグラから聴いた話を、作家である「私」が、人間の言葉して書いたものということになっている。語りモグラと作家という二重の枠に守られたドラマ・・というのがまず私が連想したことであった。

心理治療の一つの手掛かりとしても使われる「箱庭」、その枠にそってもう一つの枠を作つてからその中に箱庭を作つたとしたら、私達はそれほどに、中を守らなければ危険であるとも、また、それほどに、不安である

とも捉らえることがある。中が危険なのか、外からの侵入を危険と感じるほど守りが弱いことの裏返しなのか、いずれにしても、枠があることで安全性が守られている。その中身について、語りモグラは、「こんなすばらしいモグラのこと」と言い、作家は「こんなありそうないこと」と言う。そのこととは、「空を飛び、星を食べ、地球を危険から救ったモグラの話」である。つまり、先に述べたように、地中の存在と空の存在との同化・・「深い無意識的衝動の持つ無自覚性と強いエネルギー」と「高い精神性・高度な科学性の生み出したもの」との同化なのである、それはたしかにとんでもない危険なことなのである。しかし、現代という時代は、それが求められているときであり、だからこそ岐路（Crisis=危機）である。そして、サンジに代表される今時の子どもたちは、その先峰にいるのである。では、この二重の枠は何を示唆するのであろうか。「ありそうにない、とんでもない話」を整理し、人間の言葉を学んで語り伝える語りモグラ、それをより本にしてより広く、より永く伝えようとする作家・・とは、サンジを今の子どもに置き換えたとき、何にあたるのか？ Crisis にいる子どもたちの心を「整理し」「大人に分かる言葉にして伝えるものの存在（それは親なのか教育者か治療者か？）」、そして「より広く社会に伝えようとする大人たちの活動」なのだろうか。そう考えてみたとき、語りモグラや作家が、ただの枠としてだけでなく「伝える」という役割を持っていることが重要になる。あの、会話が成立しないサンジの行動は、それを伝えるものが別にいて、それが幾重にも力合わせることによって始めて表に現われることができた。表現する力、表現を受け取る力、それなくしては、サンジの持つ力も闇の中に消えていくしかないというのが私の連想である。

今の子どもたちは（サンジ自身がそうであるように）コミュニケーションの力としての言葉の使用能力に欠けている。本来自己表現のための手段であった「言葉」「絵画」「音楽」「身体運動」は、一定基準の元に評価される技能と化し、社会における価値基準が均一化すればするほど子どもは自分らしさを発揮できる自己表現の機会と方法を失ってゆく。語りモグラが人間の言葉を必死に覚えて作家に伝え、作家がまたそれを本にしたということは、たんに「この本ができたわけ」を語っているだけではなく、伝え・表現するということの持つ重要さを言おうとしているのではなろうか。サンジが真のトリックスターになるためには、サンジがすごい力を持つ

ているだけではいけない。高い精神性あるいは凝縮された感動体験=「星」との合一、そして、語りモグラと作家という二重の「枠（=守り）であると共にサンジを信じ、表現しようとする他者」の存在が不可欠であった。サンジを時代のトリックスターと考えるには、この作品全体の構造を今の時代に何が必要であるかを教えてくれる一つの社会構造への示唆として捉らえると共に、一人の心理発達の課題として何が必要であるかを教えるものと捉らえる必要があると思われる。自己表現の力、個性の表現を、もっと自由に許されることと、その力を信じて周囲が守り伝えなければ、今の子ども達がすごい力を持っていても、それが個人的な欲求を追及することで終わるかも知れないということである。

第6章 連想のまとめ

生の舞台を見ているときの子ども達は、目を輝かせ、生き生きと身を乗り出している。しかし、時によっては、舞台にちゃちゃを入れ、話にのらず、白けていることもある。最近の子育てや子ども達の様子に不安を感じながら、生の舞台芸術と子ども達の出会いや子ども達の人間関係の持ち方を見続けている。今の子どもたちが今までに比べて、落ち着きがなく、自分のことしか考えず、欲求のままに行動するといった特徴を強く持っていることは数多くの場所で見られることである。21世紀を間近に控えた現代、子ども達はこの今まで良いのだろうか。子ども達には何が欠けているのだろうか、そしてそれを補うものは何なのだろうか？私は、「星モグラサンジの伝説」という作品の分析から、そんな子どもたちに、未来へのトリックスターとしてのヒントを見出してみたいと思った。

主人公のサンジが今の子どもの持つ特徴だけをまるで強調したように持っていると感じたことがそのきっかけだった。サンジのごとき子ども達を嘆いても始まらない。また、後戻りすることも、説得力と手段なしでは不可能である。しかし、サンジは英雄になった。そして、サンジはトリックスターの例の漏れず、英雄になったことになど頓着せず相変わらず、自分の無意識にしたがって行動している。我々の子ども達は、はたして現代の行き詰まりにとって英雄となりうるのだろうか。そうなった後の彼らに残されるものは一体なんなのだろうかというのが私の関心事であった。

中心になるのは、「星を食べる」という事である。地下に住むモグラであるサンジは星を食べた時、それまでの「落ち着きのない、社会に適応できない、厄介者」から「英雄」への道を得たといえる。現代の子ども達に対して、その「星を食べる」という事が呼び起こす連想を我々が一つ一つ実践に移して行くことで、子ども達に新しい力への道を開くことが出来たら良いのだが・・。今の子ども達にとんでもない歪みを感じるときがあるのも事実だが、いつの時代も変わらぬ子どもならではの変化の可能性とひらめきを見る事ができるのもまた事実である。語りモグラがそのすばらしさを絶賛したように、無条件にすばらしさを信じるのも一つの支えであろう。作家が、「信じられないよ！」と言いながらも話を聴いてくれたように、引きずられずに見守る他者の目も大切である。その様な大人達の守りがあるときにのみ、子ども達は、「星を食べ」ながら、今の時代の行き詰まりを思わぬ方法で救うのかもしれない。

ここまで考えたとき、私は、「何のことではない。天に唾したようなものだ」と気がついた。子ども達が問われているのではない。問われているのは“子ども達を信じることが出来るのか”、“子ども達を見守ることが出来るのか”、“子ども達に「星を食べる」ことを提供できるのか”という大人の資質である。

今の子ども達がサンジに似た特徴を持つからと言ってこの世の行き詰まりを救う救世主となることを楽天的に求めたところで何も生まれないであろう。さらに言えば、トリックスターは一つの時代にそうたくさんいるはずもないのだが、それにしても、この子ども達の特徴は、あまりに急激に広い範囲に広がっている。また、いかにトリックスターの意外性を認め、伝えることが重要（第5章）と言っても、「テレビに出る・番組で取り上げる」というマスコミの認め方と伝達手段は、枠としての「守り」となりえるのだろうか・・・。

「星モグラサンジの伝説」からの連想はまだ次から次へと湧いて来る。またしばらく、心の中で転がしておこうと思う。

つげくわえさんと「星モグラ」公演班に感謝を込めて・・

1994/9/26 (飯塚こども劇場総会の日に)